

## 第 2 章

### 没後 100 年間におけるギッシング批評の進展

(A Cavalcade of Gissing Criticism  
in the Last Hundred Years)



Gabrielle Fleury-Gissing with Bijou (c. 1904)

ジョージ・ギッシングが1903年に死んでから100年が経過したが、この1世紀の間にギッシング自身と彼の作品についてなされた研究を概説しようとすれば、それは失望を招くだけでなく、必ず希望をも生むことになるはずである。未だかつて完成した書誌はなく、本当の意味での文献研究が企てられたこともほとんどない点を考えると、筆者が試みようとしている概説は、精選した文献ではなく落選させた文献の多さが、その特徴となりそうである。しかし、時間の経過によって多くのことがかすんでしまうとは言え、少なくともギッシングの名声の浮き沈みと、一般読者および(小説家の作品と読者の仲立ちをする)批評家の好みの変遷との両方を客観的に捉えることはできる。まだ生存している作家と違い、世を去ってから久しい作家の場合、死後に名前が残るかどうかは出版社の活動による所が大である。その意味で、1940年から1946年にかけてギッシングの作品が出版されなくなり、それまで着実に広がっていた批評の流れが途切れてしまったことは重要である。20世紀の後半が見えてきても、彼の作品の運命を楽観視するのはまだ気が早すぎるように思われた。イギリスとアメリカにはギッシングに関心を示す人がほとんどいなかったし、耳目を引くほどの意見を発する人もいなかったからである。しかし、ギッシングの名声は、彼が死ぬ数週間前に、H・G・ウェルズが手紙で「イギリスでの評判は着実に高まっていますよ。実際にあなたはハーディ、メレディス、ジェイムズの次に立派な、尊敬されている小説家です。帰国して自分で体感してみてください」と書いて寄こした時のままであった。事実、『ヘンリー・ライクロフトの私記』は出版と同時に意義深い成功を収めていたし、おそらく予期せぬことであっただろうが、大西洋の両側と更に遠く離れた日本の地で、着実に売れる本であることが証明された。

ギッシング自身と彼の作品はあとに続く数世代の人たちによって様々な角度から考察されてきた。それを説明しようとすれば、まずは英語の新聞から掘り起こされた数十もの死亡記事から始めねばなるまい。そうした記事は想像以上にずっと私的なものが多い。ギッシングの生涯についての概略は、ジャーナリズムの世界との接触がいつも少なかつたとは言え、また彼自身が自分のことを話しながらなかつたとは言え、マスコミと関係のある文学者の大多数にとって、決して知られざるものではなかつた。死亡記事の担当者たちは、オーエンズ・カレッジでの退学処分や結婚生活での不幸といった、この作家の人生の諸相について明らかにする——明らかにしすぎる——ことを慎んだと一般には思われている。例えば『デイリー・クロニクル』は「謹んで哀悼の意を表して」彼の死を報じた。おそらくH・W・マシinghamが書いたと

思われる死亡記事には、「文学の分野で真剣かつ熱心になされた努力、そして最後は最高の形で報われた努力—そうした努力の人生の背後に隠された悲哀について、印刷物で述べるようなことはできない」と書かれていた。<sup>2</sup>『デイリー・ニュース』ではC・F・G・マスタマンが、「このような運命の非道な仕打ちに対しては、全身が反感を催してしまう」と声を大にして語った。<sup>3</sup>マスタマンはギッシングの後期作品群に人間の発達を温かい目で眺める作者の姿を感じ取っていたので、彼の死の知らせを人道にもとるような行為と思ったのである。

この出来事は数多くのロンドンや地方の日刊新聞において社説の題目となった。そして、それらの予言的な内容は時としての的中することがあった。例えば『ブリストル・タイムズ・アンド・ミラー』の論説委員は、「ジョージ・ギッシング氏の死によって、イギリスは偉大な作家を—もっと有名な同時代作家たちがいずれは忘れ去られる時に、生前は控え目にしか与えられなかった理解と栄誉を来るべき世代の人々から得ることができそうな作家を—失ったのである」という洞察力に富む予言をした。<sup>4</sup>ヨークシャー州とランカシャー州の新聞の大半は、つまるところ伝記的な理由からであろうが、ギッシングの生涯を再現してみせる点で、質量ともに他を寄せつけなかった。『ヨークシャー・ウィークリー・ポスト』の記事は、意外なことにギッシングの出生地ウェイクフィールドの親戚たちについて非常に正確な話を余談として載せ、表題のない小説（やがて『ウィル・ウォーバートン』だと判明する小説）を連載すると予告して終わっている。<sup>5</sup>同新聞は後日の記事において、「非常に多くの実例を挙げながらギッシングが確信を持って強調した2つの点は、教養が極めて重要であることと、精神的な発達が低いレベルの人々を除いて、すべての人間に貧困が悪影響を及ぼすということである。彼が作品で扱っているように、この教養上の2つの項目は社会批評的には共に目新しいものと言える。（中略）ギッシングにとって教育の意味は、美しいものに共感する心を発達させ、精神的なことへの関心をそれ自体のために養うことであった」と述べている。鋭い眼力という点で、この陳述は『タイムズ』で死亡記事を担当したハロルド・H・チャイルドの意見と同列に扱った方がよい。彼は「名声よりも芸術家としての良心の方に、そして直接の報酬よりも自分の目的の方に重きを置いた人物の夭折」を嘆き悲しんだのだから。<sup>6</sup>

ギッシングの死は広範囲に及ぶ新聞社から記事にされたが、彼のことを熟知したのもあれば、よく知らないもの—少なくとも偏った見方をするもの—もあった。例えば、ギッシングは「悲観主義の主唱者」であったとか、「英

国のゾラ]であるとか、「ディケンズの弟子」だったとか、嘘とは言えないまでも驚くべきことに、「オーエンズ・カレッジの有名な学生」とか、「傑出した小説家」とか呼ばれたり、「ヨークシャー州では知らない人がいない作家」とか言われたりした。<sup>7</sup>彼の死を「三文文士街に対する告別」と報じるものもあった。<sup>8</sup>ギッシングが愛した地方から遠く離れた場所では、死亡記事を書いた大半の者が死去に伴う特有の哀愁を強調した。機会を逃すような人間ではないキーブル・ハワード、ウィリアム・ロバートソン、C・K・ショーターといった思いやりのない常習的な金棒引きたちは、「スケッチ」、「スフィア」、「ブリティッシュ・ウィークリー」、「タトラー」で失敬なことを述べ立てた。<sup>9</sup>地球の裏側では、ギッシングと弟のアルジェノンを混同した小さな新聞が2つほどあったが、<sup>10</sup>幸いにもフランス、ドイツ、オーストリア、ポーランド、スウェーデンのジャーナリストたちが、そのような失態を演じることはなかった。

亡き小説家の友人や知人の多くが、自分たちの思い出を一般読者と共に分かち合うべく、新聞社に手紙を書いて寄こしたことは興味深い。編集者に届いた手紙と記事そのものを明確に区別することは難しいようである。例えば、かつてギッシングと接触があった合理主義者G・W・フットは、『チャーチ・タイムズ』が引き起こした、肝を潰されるような事件でモーリー・ロバーツの味方についた。<sup>11</sup>また、アーサー・ボウズとT・T・サイクスのような昔の学友たちは、チェシャー州のリンドウ・グロウヴ・スクールでギッシングと一緒に過ごした日々の思い出を語ってくれた。<sup>12</sup>それから、その頃まだマンチェスター大学の教授だったA・S・ウィルキンズは、オーエンズ・カレッジ時代のギッシングの優秀な成績の証人となった。<sup>13</sup>そして、作家やジャーナリストたち、とりわけノエル・エインズリー（別名イーディス・リスター）、L・F・オースティン、ハーバート・ステュアマ、アリス・ハラード（別名アリス・ウォード）、イズリエル・ザングウィル、G・B・バーギン、ジャスティン・マッカーシーなどは、<sup>14</sup>個人および作家としてのギッシングについて、価値ある情報を提供してくれた。しかし、アメリカの新聞社（特に、あまり知られていないギッシングの作家としての揺籃時代に、何人かの友人ができたボストンの新聞社）からは、どうやら個人に関する情報は何も発信されなかったらしい。もちろん、彼の著作権代理人だったジェイムズ・B・ピンカー、<sup>15</sup>そしてエドワード・クロッド、ヘンリー・ヒック、H・G・ウェルズのように、<sup>16</sup>新聞のコラムに自分の名前が出るのをいやがるか、あるいは小説家ギッシングの芸術について手堅い評価を公にできる機会が到来するまで待ちたい

と思った人たちもいた。とは言え、そのように時間を無駄にしたい親しい批評家たちがいたこともまた事実である。アーサー・ウォー、<sup>17</sup> ナザニエル・ウェッド、エドウィン・ブジャークマン、アラン・モンクハウス、ヘンリー＝D・ダヴレイ、オースティン・ハリソンといった名前は、批評アンソロジーに見られるだけでなく、とりわけ真剣なギッシング研究への初期の貢献ゆえに、100年後の今でもまだ消えずに残っている。

ギッシングの死後、徐々にではあるが、この作家への関心が多様化し、確かな形をなしていた。このことは、当時利用できた数少ない参考図書に記されているか、あるいは以後の新聞の体系的な調査によって示すことができる。ギッシングの数々の遺作が出版されたことによって、調査し、詳述し、証明する多くの機会が生まれた。少しは世に聞こえた同時代作家たちが出版した何巻にもなる私的な回想録は言うに及ばず、当時の日刊紙や週刊紙や月刊紙までも渉猟している筆者は、自分で忘却の淵から発掘し続けているギッシング関連の記事、書評、覚え書き、短評の数の多さに、いつも驚いている。この多様化の動きは、トマス・セコム（示唆に富むけれども癖のある、間違いだらけの）概説的な序文が付いた『蜘蛛の巣の家』の出版時から、<sup>18</sup> 扇を広げたように展開して行った。早くも1906年に、ギッシングはヘスバ・ストレトンのアンソロジーに入れられたが、<sup>19</sup> 『ヘンリー・ライクロフトの私記』が引用文集や詞華集の編集者たちの眼鏡にかなう運命であったことは、その時から既に明らかであった。文学界の二流の寄稿者や愛読者たちにギッシングが宛てた種々雑多な手紙は、編集者たちによって格好の品と見なされた。特に『ティー・ピーズ・ウィークリー』の編集者は、<sup>20</sup> ギッシングが死の床に就いていた時に短篇小説「ロドニー嬢の余暇」を出版するなど、創刊時から臆せずに彼の作品の販売促進に努めてくれた。

主として中央ヨーロッパにおいて、すぐさまギッシングの作品は博士論文のテーマにする価値があると思われた。この分野の草分けはオーガスト・シェイファである。彼は早くも1908年にマールブルク大学でギッシングの生涯と小説に関する論文の口述試験を受けている。<sup>21</sup> しかしながら、この時期にギッシングの生涯について学生が何を知り得たであろうか。実際、ギッシングの知人でブリクストンの図書館員をしていたことがあるウィリアム・ベンソン・ソーンによる1909年の講演原稿から判断するかぎり、<sup>22</sup> ほとんど知られていなかったと言ってよい。と言うのは、原稿には1890年代初期にギッシングはまだ結婚していなかったと書かれているからである。ここ数十年で顕著に見られるようになった社会的、政治的、文化的なテーマに関する同種

の博士論文は、シェイファの論文から脈々として絶えることがない。例えば、女性問題やギッシング作品における古代文明の役割は、1936年にフィラデルフィアの学者サミュエル・フォウクト・ギャップによって、更に深く掘り下げて取り組まれた主題である。当時はまだ馬脚を現わしていなかった偽造者トマス・J・ワイズにそそのかされ、<sup>23</sup>クレメント・ショーターやエドワード・クロッドは、ギッシングが生存していた最後の10年に受け取った手紙の書簡集を限定版として上梓し、彼を短篇作家として、また友人として見せかけようとしたが、実際にはギッシングの自意識過剰な家族による喧嘩腰と思えるような防御態勢が、この作家の個性と生涯を完全に知る上での障害となっていた。

ギッシングが波乱に富んだ生涯で不幸を味わったように、死ぬ直前も不幸だったという意見が、1904年には早くも文化人の世界全体に広がっていた。H・G・ウェルズが「ヴェラニルダ」に付そうとした不適当な序文によって惹起された言い争いは、合衆国やオーストラリアにまで鳴り響いたが、それは旧友モーリー・ロバーツによって潤色された（腰は低いが見下したような）伝記、すなわち1912年の秋に出版された『ヘンリー・メイトランドの私生活』によって生じた激論の序曲にすぎなかった。<sup>24</sup>ギッシングの母校マンチェスター大学で、全学の奉仕活動として資金を集めたパーシー・ウィザーズによって、いわば反撃の狼煙が揚げられると、しがない地方紙『マンチェスター・シティ・ニュース』は嬉々としてギッシングの死後の名声を汚すという無礼を働いた。<sup>25</sup>フランク・スウィナトンの批評研究も故人のために尽くすことはなかった。「ギッシングについて書くことは失敗した男について書くことである」と、この成り上がりの若造は腹立たしいほどの落ち着きを見せて言った。<sup>26</sup>思い返してみると、ギッシングを真似たり剽窃したりして—気恥ずかしい証拠としてはアメリカとドイツに関するテーマがある—自分の小説を書いたスウィナトンの研究書は、苛立ちをはっきりと見せながら、ぶざまな仕事をしてしまった嫉妬深いライヴァルによる悪意に満ちた攻撃の書として読むことができる。この本をセコムは「過小評価の巧みな企て」と呼んだ。<sup>27</sup>1923年にスウィナトンのトーンダウンした別の版が出た時、その本をルイス・ホロックスは引き裂き、この著者は「未だギッシングの重要性が分かっていない」と、更にはギッシングの人生に見られる「悲劇とヒロイズムが見えていない」と非難した。<sup>28</sup>のちにスウィナトンはギッシングに関する短評を幾つか書いた際に多少は態度を軟化させたけれども、結果的に彼の本とロバーツの本は自分たちが理解できなかつたギッシングの能力と不変の社会的な意義に対

して多大の害を及ぼした。二人のあとに続いてギッシングの業績を分析したイギリス、アメリカ、そして大陸の批評家たちは、意識して二人に反論する文章を書いた。メイ・イエイツ、ルース・C・マッケイ、アントン・ロター、アントン・ウェーバー、W・ヴァン・マアネン、ロバート・シェイファは、まさにその理由で今日では尊敬すべき先駆者として見られている。<sup>29</sup>

ギッシングの死後、早々に全作品が論評され、その後すぐ彼は——本質的には長篇小説家と呼んだ方が正しいのだが——素晴らしい短篇小説家として高く評価され始めた。短篇のテーマ別アンソロジーの編集者たちについては、そこにギッシングを絶対に含めるべきだと考える者が多かった。大抵の場合、選ばれたテキストは最も人気の高い短篇集『蜘蛛の巣の家』から転載されたものだった。彼のディケンズ論、特に『批評的研究』の質と独創性は専門家によって十分に認識されたけれども、不運なロチェスター版とオートグラフ版に付した彼の序文は、古書業界以外ではずっと知られていなかった。ギッシングの唯一の旅行記である『イオニア海のほとり』は、今日ではその海岸地方を旅する人の必需品となっているが、その当時もよく知られていた。靈感を受けたように古代世界を思い描いたものとして、また遠い南イタリアの日常生活を絵画的に描写したものとして、この旅行記は称賛を受け続けている。ギッシングの作品における美しい散文の分野が、しばらく彼の社会小説を目立たなくしてしまう兆候は確かにあった。このように彼の名声を散文家の方へ展開させた——悲惨な編集をされた1927年出版の『ジョージ・ギッシングから家族への手紙』が、その名声を一時的にストップさせることはあったが——中心人物としては、アメリカの海賊版出版者トマス・バード・モウザに加え、<sup>30</sup>『セイレーン・ランド』や『オールド・カラブリア』の著者ノーマン・ダグラス、<sup>31</sup>そして1920年代からずっと多くの新聞雑誌に随筆を書いたクリストファー・モーリーといった様々な作家たちがいた。<sup>32</sup>

その頃までに、ギッシングの生涯と作品に対する関心の高まりは、いろいろな新しい形態をとるようになっていた。以下、例を幾つか挙げてみる。大半は最初に書籍、新聞、定期刊行物の中で発表された雑文を収集したもの（『不滅のディケンズ』と『チャールズ・ディケンズ論』）。ギッシングの小説や人生観に関する随筆や本の一節。1913年の『マンチェスター大学詩歌集』や1914年4月と1920年1月の『イングリッシュ・レビュー』で再掲された詩。1915年のダグラス・スレイドンや1922年のC・ルイス・ハインドといった文学者たちによる個人的な懐旧談。<sup>33</sup>エドワード・クロッドの著書『記憶』（1916）所収のギッシングから彼に宛てた手紙や、アメリカの雑誌『ネイショ

ン』の1916年8月17日号で公開されたマーサ・バーンズ宛ての新発見の手紙などがある。<sup>34</sup>ギッシングから感謝の手紙を受け取った歴史家であり、細密画の専門家でもあるG・C・ウィリアムソンのようなギッシングの誠実な崇拜者が、その手紙を中心に据えて(1921年の『書斎の扉の陰で』において)ほとんど1章分を書いたこともあった。<sup>35</sup>だが、このウィリアムソンの章よりもギッシングの名声を(美しくとは言えないまでも)立派に支えた例としては、ポール・E・モア、J・M・ケネディ、エドワード・M・チャップマン、ドロシー・ブルスターとアンガス・バレル、あるいはマデライン・カザミアンによる英文学史の本の中で、ギッシングに割り当てられた多くの章を挙げることができる。<sup>36</sup>また時には、それまで存在すら知られていなかった敵対者が声を荒げたり、攻撃の矛先を尖らせたりして、自分が少しも理解していない作家に対する積年の憎しみを表明することもあった。ギッシングは危険人物なので(伝染病流行地の)交通遮断線で隔離すべきだと考えたダグラス・ゴールドリングは、そうした不屈の敵愾心の最たる例である。彼のエッセイ「ギッシングに対する怒りの爆発」は、もともと1920年の『世評』に収められていたが、28年後に『人生の関心事』で発表の新たなチャンスを与えられた。<sup>37</sup>

こうした暗愚な批評の類は書籍や自筆原稿の収集家たちによって無視されていた。一方、ギッシングの死後30年から40年の間、彼自身の手によって書かれた興味深い文書に関しては、非常に多くの活動がなされた。当時の競売や古本屋の目録には、後世の収集家たちの注意を釘づけにするような項目が数多く掲載されている。そうした開拓者たちは—自分たちの宝物が新たに競売場を経由して、真剣な研究がなされる大きな機関の図書館に永住の地を見出した場合には—研究の補助をしたことになるという意味で、無意識的な活動だったにせよ、重要な役割を果たしたと言える。彼らのギッシングに対する文化的な熱意と称賛を具体的に示す証拠は、ジョージ・マシュー・アダムの「私がジョージ・ギッシングを集める方法と理由」(ギッシングが1898年までの本について書いた勘定書の貴重な複写つきで『コロフォン』第18部に掲載された記事)だけでなく、<sup>38</sup>『条件付きの女相続人』(1923)や『ヨークシャーの娘』(1928)といった未出版あるいは未回収だった短篇小説の限定版にも反映されている。ギッシングの主要作品もそれ以外の作品も、十分に把握される方向へゆっくりと着実に進んでいるが、彼の生涯(特に最も謎めいた部分)の把握については進んでいない。これまで採録されたことがない原稿や献呈本については、ウォルター・T・スペンサーが『我が書店40年史』(1923)の中で興味深い説明をしている。<sup>39</sup>これは意外な新事実を明らかにしており、

80年後の今でも色あせることがない本である。

ギッシングの作品に関する当時の批評は、20世紀末期の基準で見れば、概して初歩的なものであった。その理由は瞭然として明らかである。勝手気ままに杜撰な編集がなされた家族宛ての手紙やショーターとクロッドに宛てた数通の手紙を除いて、ギッシングの書簡はまだ大部分が知られていなかったからである。是非とも必要とされた完全な形での作品論が豊かなものとなれなかった理由はそこにある。ギッシングの家族は彼の生涯について率直にコメントしながらなかったにもかかわらず、表面を取り繕うというヴィクトリア朝特有の性質を帯びた興味深い記事を幾つか書いている。ギッシングの下の息子アルフレッドは、父の日記と叔父さん(アルジェノン)や叔母さんたち(マーガレットとエレン)に宛てた手紙を基礎資料として伝記を書こうとしたが、中身の大半は長ったらしい引用からなっていたので、そうした単調で時代遅れの原稿を本にしたがるような出版者を見つけることはできなかった。しかしながら、1930年代末には新分野を切り開きたいと思う学者が数多く見られるようになった。その開拓地を早くも1922年9月に見せてくれたのは、アメリカの学者スタンリー・オールデンによる『ノース・アメリカン・レビュー』所収の論文「ヒューマニストとしてのジョージ・ギッシング」である。<sup>40</sup> また、『暁の労働者たち』の優れた編集(1935)などで、ロバート・シェイファは「ジョージ・ギッシングの生命力」の理由について洞察力に富む考察をしている。<sup>41</sup> 彼の研究や、ベラム・エルガー、J・W・カンリフ、ハーバート・J・マラ、H・V・ラウスといった研究者たちの刺激的なギッシング批評は、<sup>42</sup> とりわけジョージ・A・スターンズ、オースティン・ハリソン、ウィリアム・ロウセンスタインの価値ある個人的な回想の助けを得て、新しい一步を踏み出したのであった。<sup>43</sup>

1938年、家族の中でただ一人まだ父の作品に敬意を払っていたアルフレッド・ギッシングは、彼の叔父で嫉妬深かった、意志薄弱のアルジェノンが実兄の伝記を書くという約束を守っていなかったので、その頃にはほとんど完全に忘れられてしまっていた父の短篇小説を集めてみようとした。この最後の収穫物は、すべて粒ぞろいだとは言えなかったが、その内容は『テンプル・バー』に掲載された初期作品で始まり、晩年の1900年に終わっているという点で、特に興味深いものであった。<sup>44</sup> その時、珍しいギッシングの本であれば絶対に見逃したくなかった読者たちは、これで未回収の資料探索は終わったとか、これからはギッシング研究も退屈きわまりなくなるだろうとか、思ったに違いない。しかし、思い返してみると、終わりになったのはほんの初期

段階の研究であったことが容易に分かる。そして、第2次世界大戦の勃発によって、ギッシング研究が進展する当面の見込みは、すべて打ち壊されてしまったのである。

1940年から1946年の間、ギッシングの本については、たった1つの新しい印刷物も出されなかった。しかしながら、戦時中でも何かが芽生えるような兆しが少しは見られた。アメリカの幾つかの大学図書館がギッシングの珍しい版や献呈本を低価格で購入していたので、特別所蔵品となった資料に関する論文が少しずつ現われ始めていたのである。新たな目録が作られたイエール大学のアダムズ・ギッシング・コレクションは、1942年1月の『イエール大学図書館新聞』で初めて詳述された。<sup>45</sup> イギリスでは、同年5月15日の『ラジオ・タイムズ』が、フランク・スウィナトンによるギッシングの講話を予告した。10月になると『クラシカル・ジャーナル』が「ジョージ・ギッシングの学識についての所見」という苦心して書かれた記事を読者に提供した。<sup>46</sup> イギリスの自然主義について1925年にフランス語の学位論文を書いたウィリアム・C・フライアソンは、引き続き1942年にギッシングの再評価を行なった。<sup>47</sup> そして翌1943年、ジョージ・オーウェルはギッシングのマサチューセッツ州ウォルサム時代の生徒、マーサ・バーンズについての調査を手掛かりに、この先輩作家に関する最初の論文を4月2日の『トリビューン』に発表した。<sup>48</sup> それによれば、この女性は1890年代中頃にギッシングとの交友を再開していたそうである。

戦時中、ギッシングに対する持続的な関心——範囲は限定されたが——を示すものは、主としてアメリカから発せられていた。イギリスがささやかながら声を発するようになったのは1940年代の後半になってからである。ジウィック・アンド・ジャクソン社だけでなく、ホーム・アンド・サル社によっても、<sup>49</sup> ギッシングの再流行のために好意的な努力が断続的になされた。しかし、一方では戦争とその余波がギッシングとその作品を国民意識の背後に追いやってしまい、他方では「人生の夜明け」、「女王即位50年祭の年に」、「渦」に新しい力を与えようとする試みがなされた。それはごちない（あるいは身が入っていない）試みであった。これら3つの小説と4つ目の『都会のセールスマン』は、1956年にメッシュエン社から再発行されたが、結局すべて安値で処分されてしまった。明らかにギッシングの小説は、序文があるうとなかろうと（ウィリアム・プロマーによる『人生の夜明け』の序文は、1947年度版と同様に見識のある刺激的なものだったが）、もっと若い世代の新しい読者を見つけなければならない時期に来ていたのである。『ニュー・ステイツ

マン]、『タイムズ文芸サプリメント』、『リスナー』といった週刊誌に掲載されたV・S・プリチェット、ウォルター・アレン、ウィリアム・プロマーによる主要論文の大半は、<sup>50</sup> ギッシングの作品が持つ重要性和特異性に世間の注目を引き付けたが、彼の悲観主義はたびたび主観的な見方がなされ、かなり露骨に反論されることが多かった。この点で、マイファニー・エヴァンズが書いた「悲惨な気持ちを育む」という不適當で不器用なタイトルの論文(『タイム・アンド・タイト』の1953年3月7日号に掲載)は、<sup>51</sup> 読者がギッシングについて偏見なしに考えるのを妨げ、彼の気質や所信を単純化する傾向があった当時の批評家たちの意見を単に追認しただけであった。一方、最近発見された北イングランド向けの地方ホームサービスによる『女王即位50年祭の年に』の連続ドラマを含め、<sup>52</sup> 1940年代から50年代の様々なラジオ番組はギッシングの読者層拡大に貢献した。また、それまで不明だった手紙が集められ、特にイエール大学図書館、ニューヨーク公立図書館、カール・H・プフォルツハイマー図書館といった主要なギッシング・ライブラリーに送られていたことは特筆に値する。<sup>53</sup>

当時はそれほど重要だとは思われていなかったに違いないが、現在の人々にとって1950年は非常に重要な出版物が幾つか見られた年である。ジェイコブ・コールグは彼にとってギッシングに関する初めての論文となる「ジョージ・ギッシングの追放された知識人たち」を『アメリカン・スカラー』で発表し、ウェイクフィールドを旅したラッセル・カークは、『西洋人文科学レビュー』の夏季号で「ジョージ・ギッシングを誰か知っているか?」を発表した。<sup>54</sup> また、イタリアの雑誌『イル・ポンテ』は、『イオニア海のほとり』の1章を翻訳の形で読者に提供した。この本はのちに詩人で英語学者のマルガリータ・グイダッチの手によって全体が先例に従って翻訳され、ギッシング生誕100周年を祝うことになった。<sup>55</sup> ギッシングへの新たな関心の高まりは緩やかであったが、これぞという重要な時期に幾つかの要因が好都合に働いた。例えば、50年前の彼の死を記念して、ニューヨーク公立図書館のベルグ・コレクションと彼の故郷ウェイクフィールドでは、先駆けとなるような展示会が催された。ニューヨークの展示会の目録はジョン・D・ゴードンの力作であったが、<sup>56</sup> これはあとで判明するように現代のギッシング研究において画期的なものであった。作家の青年期に関する伝記の1つだと言えるし、特に未刊の手紙から取った多数の引用文や幾多ものオリジナル文書の説明文を収めた点で価値があると言える。

1950年代の中頃から、コールグと他のアメリカ人学者たちは、大学図書館

で増大していた所蔵品の正確な調査を開始していた。コールグが1955年にギッシングの「目的的不一致」について書いた論文は、ロイヤル・A・ゲットマン、A・C・ヤング、C・J・フランシス、ハリー・E・プレブルによる様々な論考の礎石となった。<sup>57</sup>しかしながら、伝記的な研究は何年もの間まだ底が浅いままであった。ギッシングの書簡や日記によって多くの示唆が与えられるのに、そうしたものを浅はかにも無視したり、利用せずに放置してしまったからである。ゴードン・ヘイトが『ノーツ・アンド・クウェリーズ』の1964年6月号で基本的な系図の復元を初めての試みとしてやってみたが、<sup>58</sup>そこでの彼の提言はのちの本格的な調査によって、どれも間違いであることが証明された。テキスト研究も開始され、『無階級の人々』の2つの版を考察したジョゼフ・ウルフの論考が、『19世紀小説』の1953年6月号に載った。<sup>59</sup>それは短篇小説「哀れな紳士」がアメリカのテレビ用に脚色された年である。その後すぐにジェイコブ・コールグは、ギッシングの私記(とりわけ備忘録)が彼の出版された小説の中で、どのように使われているかを示した。学術的な分析におけるコールグの主な継承者としては、いわゆる『アメリカ覚え書き』と『覚書帳』、『ジョージ・ギッシングの仕事』、『父の思い出』といった題名の本を書いたバウア・ポストマスと筆者がいる。<sup>60</sup>

しかしながら、これはまだ序幕の段階にすぎない。今まさに筆者が検証しているギッシング研究100年の第1期が、1939年から40年に終わったとはっきり確認されるならば、第2期は1940年から大体1958年あるいは60年がその射程に入るであろう。この中期における新しいギッシング批評の展開は、例えば『タイムズ文芸サプリメント』などで、アンソニー・カーティス、ジョン・ミドルトン・マリ、リチャード・チャーチ、V・S・プリチェットによって実名あるいは匿名で書かれた論文すべてに顕著に見られる。<sup>61</sup>彼らは全員、ヴィクトリア朝研究がまだ初歩の段階にすぎなかった頃に、そしてギッシングの作品がしばしば政治的観点から見られるようになる前から、この小説家の名声の維持に努めた人たちである。一方、レイモンド・ウィリアムズ、ジョン・ルーカス、P・J・キーティング、ジョン・グッドに加えて、アラン・スウィングウッド、更に最近ではパトリック・ブラントリンガーが次第にギッシングを批判するようになった。<sup>62</sup>その理由は、ギッシングの分析が無党派の立場からのものであり、上流階級のみならず下層階級をも大胆に批判したこと、そして当然ながらマルクス主義に肯定的な反応を示さなかったことにある。ジョン・ケアリは『知識人と大衆』の中で異常とも言えるほど愚鈍と凶暴な敵意を見事に結び付けてしまった。<sup>63</sup>ギッシング批評もまた数十

年間、いわゆる文学理論家たちの意見によって影響を受けることになった。一番最近の例はジル・ドゥルーズではないだろうか。<sup>64</sup>しかし、そうした政治的、方法論的な「再接近」について、<sup>65</sup>大抵の読者は不自然で無益だと、そして隠れた動機によって誘導されがちだと考えていた。ギッシング生誕 100 年記念事業から派生した形で書かれ、資料によって十分に立証された多くの論文の方が、伝記的な観点ではずっと役に立つ。例えば、ギッシングとエドゥアルト・ベルツの関係を扱った A・C・ヤングの詳しい論考、C・J・フランシスによるギッシング作品に見られるショーペンハウアーの思想研究、1960 年に死後出版されたオーウェルの独創性に富むギッシング論文の第 2 弾、ロシアの雑誌『ヴェースニク・イヴローピ』にギッシングが寄稿した文章のプレブルによる発掘作業、日本における『ヘンリー・ライクロフトの私記』と短篇小説の異常な人気についての小池滋による概説などがある。<sup>66</sup>

このように数ヶ国の学者が関与した非常に多岐にわたる活動に加え、それまでは断続的なものにすぎなかったギッシング研究を新たに促進させた例として、この作家の手紙と日記を幾つかの重要な書物の形で数年の間に出版したことが挙げられる。最初の書物は 1961 年出版のギッシングとウェルズの往復書簡であったが、それは興味深く優れた編集だったとは、お世辞にも言えない。ロイヤル・A・ゲットマンは物事の表面にちょっと触れて、スケートのように——あまり優雅な滑りではなかったが——滑っただけであった。結果的に彼は後続の者をたじろがせるほど多量の仕事を残してしまった。その 6 ヶ月後に出たベルツへの手紙の書簡集は、プロの作家で当時随一の知的人物であったギッシングに少なからぬ光明を投じた。また、ジェイコブ・コルグによる 1962 年版の『備忘録』は、ギッシングの仕事を明らかにしてくれた。失敗に終わったギッシングのイーディス・アンダーウッドとの結婚生活を回想録風に文書化した『ガブリエル・フルリへの手紙』(1964) は、(1912 年にモーリー・ロバーツによって大まかにしか示されず、1954 年にメイベル・コリンズ・ドネリーによって更に不十分な形でしか報告されなかった) 結婚生活の浮き沈みを暴露するものであった。これらのラヴレターによって公開された情報は、ジェイコブ・コルグがギッシングの評伝 (1963 年にシアトル、1965 年にロンドンで出版) を準備していた頃には、まだ知られていなかった。その欠落した情報を事実に基づいた形で完全に補うことになったのは、次の 20 有余年の間に陸続として現われた書物である。特に、共に 1973 年に出たヘンリー・ヒックとエドワード・クロッドに宛てた手紙のエニサーモン社版の書簡集、そして共に 1978 年に出た筆者の編集によるギッシングの日

記と、コールグ夫妻（ジェイコブとシンシア）がエニサーモン社から出した『ジョージ・ギッシングの小説論』に収められたアルジェノン・ギッシング宛ての内容豊富な手紙の抜粋とが目を引く。

そうこうするうちに、ギッシングの読者層の拡大に貢献する出版物が、他に幾つも現われた。彼の作品は事実上すべて1987年までに——しばしば校訂版として、特に20タイトルを出したジョン・スピアーズ担当のハーヴェスター社と5タイトルのホガース社によって——再版されていた。次の10年でも同様に、エヴリマンズ・ライブラリーのJ・M・デントによって5タイトルが再版された。批評アンソロジーを出版したのは筆者（1968年の『ジョージ・ギッシング論文集』および1972年にコリン・パートリッジと共編した『ギッシング——批評の遺産』）、ジャン＝ピエール・ミショー（1981年の『ジョージ・ギッシング——評論』）、そしてフランチェスコ・パドラート（1984年の『批評論文集』）であった。最後の本は1960年代中頃以降のイタリアにおけるギッシング研究を集めた大著である。エディンバラのトラガラ社も限定版という独特の方法で一般大衆の注目をギッシングの名前に引きつけた。その限定版『短い幕間』（1987）には、イーディス・シチル宛てのギッシングの手紙が、筆者による注釈つきで収められている。<sup>67</sup> 更に、筆者は半ば忘れられていた短篇小説「造化の戯れ」（1990）を編集した。この短篇は当時（ある編集者によって不正に改竄されて付けられた）「市役所職員プログデン氏」という題名でしか知られていなかった。トラガラ社はP・F・クロフォラーが精選したギッシングの『警句と所見』（1989）という趣味のよい出来ばえの抜粋集と『イオニア海のほとり』のデラックス版も出版している。

主要作品の批評と考察は、（短篇を除く）小説の再版とほとんど同時進行的に続々と上梓された以下の書物の中で、実践されている。死後出版されたオズワルト・デイヴィスの非常に風変わりな本（1966）は、ある書評家によって「単なる礼状」と呼ばれた。ジリアン・ティンダルはギッシングの生涯の主要な出来事と結び付けて、長篇小説をテーマの観点から調査した。アドリアン・プールは同時代の文学的なコンテクストの中でギッシングを再考し、ジョン・グッドは批評家としての自分のイデオロギーに照らして、ギッシングの小説を重苦しい講義形式で分析した。主要作品を作家の生涯と関連させて考察したジョン・ハルペリンの本は、牽強附会になりがちな伝記中心主義を特徴としている。ロバート・セリグはギッシングの芸術のあらゆる形式を完璧かつ簡潔に分析してくれた。デイヴィッド・グリルズはギッシングの魅力的なパラドックスに焦点を定めて多くの成果を生み出している。ジョン・

スロウンはギッシングの生涯を通しての(教養を武器とした)抗議を分析し、クリスティーナ・シャーホルムはギッシングの結婚描写に焦点を定めて考察した。これらの批評書は概して小説家ギッシングの多様な芸術性に光を当てながら分析のメスを入れている。しかし、それほど内容が豊富でないにせよ、時にはずっと役に立つ書物や本の1章や論文——『ギッシング・ニューズレター』と後継誌の『ギッシング・ジャーナル』は、これらを1960年代中頃から完全と言ってよいほどの形で記録に残してきた——もたくさんある。それらの中で(あるいは、その点では2つの季刊誌の中でも同じように)行われてきた調査の多くはユニークなもので、その発表が前掲の批評書の前であろうと後であろうと、内容の重複などは決して見られない。

ここで次に挙げる研究に注意を払わなければ、公平を欠くことになるだろう。P・J・キーティングの『ヴィクトリア朝小説における労働者階級』——この批評家のイデオロギーである先天主義を乗り越えることができていない研究——に収められたギッシング関連の部分。<sup>68</sup> パトリック・ブリッジウォーターのギッシングとドイツについての研究論文。レイチェル・ボウルビーの『ジャスト・ルッキング』。グウィン・ニールの調査が行き届いたギッシングとウェールズに関する『素晴らしい過去の日々』という小冊子——クリフォード・ブルックがウェイクフィールドを、W・J・ウェストがエクセターを、ギッシングと関係させて書いた(あまり目立たない)小さな本のような特化した研究に比肩する小冊子。これらと並べて置かねばならないのは、それぞれの時代に人々の耳目を集め、時が経過しても風化しなかった論文である。例えば、ロバート・セリグが『英文学研究』と『19世紀小説』にそれぞれ発表した『女王即位50年祭の年に』と『三文文士』についての論文、チャールズ・スワンによる『流謫の地に生まれて』の印象深い論考、アラン・アトラスによるギッシングと音楽に関する2つの権威ある論文、『ギッシング・ジャーナル』にマーサ・ヴォウグラとパウア・ポストマスが発表した完璧な調査報告、『渦』を歴史的な時代物として分析したウィリアム・グリーンレイドによる『ヴィクトリア朝研究』の掲載論文などが挙げられる。<sup>69</sup> しかし、ここで列挙するのをやめると、一連の新生面を開いた論文、例えば『ギッシング・ジャーナル』に掲載されたジャニス・テレダルの一連の論考、特に『渦』についてのヘンリー・ジェイムズのうぬぼれた、まとまりのない、不当な書評についての論文と、『我らが大風呂敷の友』においてイズレの最大傑作が果たした役割に関する論文を見落とすことになる。<sup>70</sup> 過去20年の間、ギッシングの小説はほとんどすべてイギリス、アメリカ、イタリアの批評家たちから重要な再評価を

されてきた。『サーザ』はフランチェスコ・マローニが提示した観点によって、『ウィル・ウォーバートン』はすぐ手近にあるルイザ・ヴィラの注釈を使って再読されるべきである。<sup>71</sup>

ギッシング批評は相当な量で増え続けていたので、それまでの批評の進展については、雑誌の中だけでなく書物の形としても調査報告する必要があった。その必要性を最初に痛感した米国近代語協会 (MLA) は、ジェイコブ・コールグによるギッシングの章を収めて、1964年にライオネル・ステイーヴンソン編集の『ヴィクトリア朝小説—研究の手引き』を出版した。<sup>72</sup> また、1978年には再びコールグによって更新されたギッシング研究の調査を収めて、ジョージ・H・フォード編集の『続・手引き』を出した。<sup>73</sup> これら2つの手引きが出る間に、コールグは『ブリティッシュ・スタディーズ・モニター』の1973年夏季号で似たような報告書を寄稿するように任命された。<sup>74</sup> それはちょうどジョゼフ・ウルフが『ジョージ・ギッシング—関連文献の注釈つき書誌』(1974)を、ジョン・ハルペリンが『小説研究』の1976年春季号に「ギッシングの再流行—1961年から74年まで」を発表する前のことであった。<sup>75</sup> この種の最新の調査は、『英文学の変遷—1880年から1920年まで』の第32巻(1989)第4号に収められた筆者の「ギッシング研究における最近の研究と展望」ではあるまいか。<sup>76</sup> 更に、この問題と関連するものとして、第3版『ケンブリッジ版英文学文献一覧』の第4巻(1999)がある。そこでは全く新しいギッシングの項目が、1969年版のブラッドフォード・A・ブースによる不完全な項目に取って代わっている。<sup>77</sup> マイケル・コリーによる主要文献一覧の(1975年と1985年の)2つの版は長い間、この問題について確かな知識を持つ学者によって、役に立たないと非難されてきた。逆に、『20世紀英文学関連の原稿および書簡の所在記録』を例に挙げるまでもなく、<sup>78</sup> 収集家、書籍商、図書館員たちは価値のある研究補助部隊であることが証明された。

過去100年におけるギッシング研究に関して、もう1つの重要な業績である『ジョージ・ギッシング書簡集』を黙って見過ごすことはできない。この編集については、1999年9月の国際ジョージ・ギッシング会議(於アムステルダム)で、活気にあふれた議論がなされた。全9巻を準備するために必要な研究は膨大な量だったので、その成果の全部が目に見える形で序文と注釈に載っているわけではない。ギッシングとジョン・ノーザン・ヒリアド、ハーバート・ヒートン・ステュルマー、アドルフ・ウィリアム・ウォード、アーサー・ブラウンロー・フォード、ジョン・ショートリッジとの関係について、<sup>79</sup> 『ギッシング・ニューズレター』や『ギッシング・ジャーナル』で発

表された一連の論説が、堂々とした建物全体の最後の仕上げと見なしてもよいブライアン・バロウ・ダンに捧げられた本と共に、そのあふれ出るばかりの成果を構成している。<sup>80</sup>

今まさにギッシング研究の新しい展開が明確な形をなし始めている。しかしながら、書簡集の第10巻はまだ先のことである。今まで知られていなかった、あるいは一部しか発表されていない手紙に加え、種々雑多な短信、葉書、手紙の断片がほんの少し集まったにすぎない。そうした手紙のオリジナルは、ギッシングの子孫が金に窮して手放した1930年代に、消失してしまっている。しかし、『書籍オークション記録』や『書籍価格動向』の古い号に記載された資料と共に、その他の手紙もまた遅かれ早かれ姿を現わすことだろう。その間に、筆者が準備を進めている網羅的な第一級の書誌が、是非とも必要とされる短篇小説の完全収録版—おそらく全3巻になるだろうが—と一緒に、出版されているはずである。もし運がよければ、筆者によるギッシングの伝記もそれに続くだろう。しかし、イギリス、合衆国、オランダ、イタリア、そして日本では、若い世代の人たちが頑張って仕事をしている。そうした人たちの前に広がった、大きな、遮るものがない空間で、どのような花が咲くことになるのか、筆者には予言できない。

出典：Pierre Coustillas, "Gissing: A Life in Death—A Cavalcade of Gissing Criticism in the Last Hundred Years" (July, 2003).

## 註

この章で言及された文献の中で、本書の巻頭にある「文献一覧」に掲載されている文献については、以下の註で取り上げない。

- 1 1903年11月23日付けのH・G・ウェルズ夫妻からの手紙 (*Letters* 9: 161) を参照。
- 2 H. W. Massingham, "Death of George Gissing," *Daily Chronicle* (29 December 1903) 3, 4.
- 3 C. F. G. Masterman, "George Gissing," *Daily News* (30 December 1903) 5.
- 4 Anon., "George Gissing," *Bristol Times and Mirror* (30 December 1903) 4, 5.
- 5 Anon., "Mr George Gissing," *Yorkshire Weekly Post* (2 January 1904) 2.
- 6 Harold H. Child, "Obituary: Mr George Gissing," *Times* (29 December 1903) 4.
- 7 "Apostle of Pessimism," *Daily Mail* (29 December 1903) 3; "Death of Mr Gissing: The English Zola," *Yorkshire Daily Observer* (29 December 1903) 4; "Death of

- George Gissing: Disciple of Dickens Dies in France,” *Echo* (29 December 1903) 2; “Death of Mr George Gissing: A Famous Student of Owens College,” *Manchester Evening News* (29 December 1903) 3; “Death of Mr Gissing: An Eminent Novelist,” *Leeds and Yorkshire Mercury* (29 December 1903) 5; “Well-Known Yorkshire Novelist Dead,” *Leeds Daily News* (29 December 1903) 3.
- 8 Anon., “Farewell to Grub Street: Death of Mr George Gissing, the Novelist,” *Daily Mirror* (29 December 1903) 4.
- 9 Keble Howard, “Motley Notes,” *Sketch* (6 January 1904) 408, 410; C. K. Shorter, “A Literary Letter,” *Sphere* (2 January 1904) 4, (9 January 1904) 48, (23 January 1904) 90, and (30 January 1904) 112; William Robertson Nicoll, “A Man of Kent: The Late Mr George Gissing,” *British Weekly* (31 December 1903) 345; C. K. S., “Literary Gossip,” *Tatler* (6 January 1904) ix.
- 10 “Obituary: Mr Algernon Gissing,” *Examiner* [Launceston] (30 December 1903) 5 and (31 December 1903) 5; “Obituary: Mr Algernon Gissing,” *Weekly Courier* [Launceston] (2 January 1904) 26.
- 11 G. W. Foote, “Soul Snatchers,” *Freethinker* (17 January 1904) 33; Morley Roberts, “In Memoriam: George Robert Gissing,” *Church Times* (8 January 1904) 33, “The Late George Gissing” (15 January 1904) 61 and (29 January 1904) 130. この事件については第1章「ギッシングの生涯」の註67を参照。
- 12 Arthur Bowes, “George Gissing’s School-Days,” *T. P.’s Weekly* (22 January 1904) 100; T. T. Sykes, “The Early School Life of George Gissing,” *Alderley and Wilmslow Advertiser* (29 January 1904) 3.
- 13 A. S. Wilkins, “The Late Mr George Gissing,” *Manchester Guardian* (31 December 1903) 10. Augustus Samuel Wilkins (1843–1905) は1868年にオーエンズ・カレッジのラテン語講師となり、翌1869年から1903年まで教授職にあった。
- 14 Noel Ainslie, “George Gissing,” *Daily Chronicle* (31 December 1903) 7; L. F. Austin, “Our Note Book,” *Illustrated London News* (2 January 1904) 2; Herbert Sturmer, “George Gissing,” *Week’s Survey* (9 January 1904) 173–74; Alys Hallard, “Paris Notes,” *Author* (1 February 1904) 118; Israel Zangwill, “Without Prejudice: George Gissing,” *To-Day* (3 February 1904) 433–34; G. B. Burgin, *Book Lover* (1 March 1904) 29; Justin MacCarthy, “Politics and Literature in England,” *Independent* (18 February 1904) 379–81.
- 15 『命の冠』執筆中の1898年に、ギッシングはイーディスの手当てを週2ポンドに増やす必要などもあって、ヘンリー・ジェイムズをはじめとする有名作家を担当していた辣腕のピンカー (James B. Pinker, 1863–1922) に代理人を代えた。
- 16 クロッド、ヒック、ウェルズについては、第1章「ギッシングの生涯」の註47, 61を参照。
- 17 Arthur Waugh, “George Gissing,” *Fortnightly Review* (1 February 1904) 244–56.

- 18 『蜘蛛の巣の家』はコンスタブル社から1906年5月に上梓され、7ヶ月で3版を重ねるほど売れ行きがよかった。セコムは序文で「ギッシングは作品構成の理論に通じているが、それを話の展開の中で示すことができなかった」と断じている。
- 19 Hesba Stretton, *Thoughts on Old Age* (London: Religious Tract Soc., 1906).
- 20 『ティー・ピース・ウィークリー』(*T. P.'s Weekly*)はThomas Power O'Connor (1848-1929)によって1902年に創刊された。オコナーはジャーナリスト・政治家で、多くの新聞の創刊と編集に携わった。
- 21 August Schaefer, *George Gissing: Sein Leben und Seine Romane* (Marburg, Ger.: U of Marburg, 1908).
- 22 William Benson Thorne, "George Gissing," read in November 1909 to the Borough of Poplar Readers' Union at the Bromley Library in East London. 講演の原稿はウェイクフィールド公立図書館にある。
- 23 Thomas James Wise (1859-1937). 17-19世紀の著名作家の詳細な収集目録を数多く編纂して書誌学協会会長(1922-24)を務めたが、1934年に50点以上の稀覯書を偽造販売していたことが発覚して失脚。彼の死後、蔵書は大英博物館に売却された。
- 24 Pierre Coustillas, "The Stormy Publication of Gissing's *Veranilda*," *Bulletin of the New York Public Library* (November 1968): 588-610. ウェルズはアルジェノンから依頼された序文でギッシングの人格と作風を酷評したために原稿の受け取りを拒否された。それを『ヴェラニルダ』の出版前後に別の所で発表した結果、ウェルズは多くの新聞から叩かれてしまった。ギッシングを妄断したロバートの本とフランク・スウィナトンの批評書は同じ1912年に出版されたが、ウェルズが彼らを擁護したことは言うまでもない。
- 25 Percy Withers, "George Gissing, Novelist," *Manchester Courier* (6 March 1912) 6; *Manchester City News* (8-29 March 1913) *passim*.
- 26 Swinnerton 42.
- 27 Thomas Seccombe, "Gissing: A Sentiment," *New York Times Review of Books* (8 December 1912) 753-54.
- 28 Lewis Horrox, "George Gissing and Mr Swinnerton," *Nation and Athenaeum* (1 March 1924) 770-72.
- 29 W. Van Maanen, "George Gissing's Life from his Letters," *Neophilologus* (January 1933): 115-30; Robert Shafer, "The Vitality of George Gissing," *American Review* (September 1935): 459-87.
- 30 Thomas Bird Mosher (1852-1923)は1891年に出版業を始めてから死ぬまで、700冊の本と240号まで続いた月刊文学雑誌(*The Bibelot*)を出版した。版權についてリベラルな解釈をしたので著作権侵害者(literary pirate)の異名を取った。通信販売によって豪華本を廉価で利用できるようにした先駆者。
- 31 Norman Douglas, *Siren Land* (London: Dent, 1911); *Old Calabria* (1915; New

- York: Modern Library, 1928).
- 32 Christopher Morley (1890–1957). 米国のジャーナリスト・編集者・作家。 *Saturday Review of Literature* を創刊した一人で編集長 (1924–40) も務めた。 *Ladies' Home Journal* などの雑誌や新聞の編集に参加してコラムを執筆。 *Parnassus on Wheels* (1917) など、多数の小説や随筆がある。
- 33 Douglas Sladen, *Twenty Years of My Life* (London: Constable, 1915); C. Lewis Hind, *More Authors and I* (London: Bodley Head, 1922).
- 34 Edward Clodd, *Memories* (New York: Putnam's, 1916). *Nation* (17 August 1916). マーサ・バーンズについては第1章の註12を参照。
- 35 George Charles Williamson, *Behind my Library Door: Some Chapters on Authors, Books and Miniatures* (London: Selwyn, 1921).
- 36 Paul E. More, "George Gissing," *Nation* (13 March 1913) 256–57; J. M. Kennedy, *English Literature 1880–1905* (London: Swift, 1912); Edward M. Chapman, *English Literature in Account with Religion, 1800–1900* (Boston: Mifflin, 1910); Dorothy Brewster and Angus Burrell, *Adventure and Experience: Four Essays on Certain Writers and Readers of Novels* (New York: Columbia UP, 1930); Madeleine Cazamian, *Le Roman et les idées en Angleterre* (Strasbourg, Fr.: Oxford UP, 1923).
- 37 Douglas Goldring, "An Outburst on Gissing," *Reputations* (1920): 125–32.
- 38 George Matthew Adams, "How and Why I Collect George Gissing," *Colophon* 18 (1934): n. pag.
- 39 Walter T. Spencer, *Forty Years in my Bookshop* (London: Constable, 1923) 217–22.
- 40 Stanley Alden, "George Gissing, Humanist," *North American Review* 216.3 (1922): 364–77.
- 41 Robert Shafer, ed., *Workers in the Dawn* by George Gissing, 1st American ed. (Garden City, NY: Doubleday, 1935).
- 42 Pelham Elgar, *The Art of the Novel* (New York: Macmillan, 1933); J. W. Cunliffe, *English Literature during the Last Half-Century* (New York: Macmillan, 1919); Herbert J. Muller, *Modern Fiction: A Study of Values* (New York: McGraw-Hill, 1937); H. V. Routh, *Towards the Twentieth Century: Essays in the Spiritual History of the Nineteenth Century* (Cambridge, Eng.: Cambridge UP, 1937).
- 43 George A. Stearns, "George Gissing in America," *Bookman* (August 1926): 683–86; Austin Harrison, *Frederic Harrison: Thoughts and Memories* (1926; New York: AMS, 1977); William Rothenstein, *Men and Memories* (London: Faber, 1931–32).
- 44 『テンプル・バー』 (*Temple Bar Magazine*) は1860年に創刊された1シリングの文学雑誌で、1906年までに553号を発行した。オースティン、W・コリンズ、C・リード、ステイーヴンソン、コナン・ドイルなどの作品を出版して人気があった。1867年から95年までの編集長はチャールズ・ベントリーで、未刊に終わったギッシングの『グランディー夫人の敵たち』 (*Mrs Grundy's En-*

- emies*) の件で良心の呵責があった彼は、短篇小説「フィービ」(“Phœbe”) を掲載してくれた。
- 45 Richard F. Niebling, “The Adams-Gissing Collection,” *YULG* 16.3 (1942): 47–50.
- 46 Norman Daley, “Some Reflections on the Scholarship of George Gissing,” *Classical Journal* (October 1942): 21–30.
- 47 William C. Frierson, *L'influence du Naturalisme français sur les romanciers anglais de 1885 à 1900* (Paris: Giard, 1925) 205–18; “George Gissing,” *The English Novel in Transition 1885–1940* (Norman, OK: U of Oklahoma P, 1942) 101–06.
- 48 George Orwell, “Not Enough Money,” *Tribune* (2 April 1943) 15.
- 49 Sidgwick and Jackson も Home and Van Thal も ロンドンの出版社で、後者は例えば 1947 年にウィリアム・プロマー (William Plomer) の序文を付けて『人生の夜明け』を出している。
- 50 V. S. Pritchett, *Books in General* (London: Chatto, 1953); Walter Allen, “The Permanent Stranger,” *Times Literary Supplement* (14 February 1948) 92; William Plomer, “Books in General,” *New Statesman and Nation* (23 February 1946) 140.
- 51 Myfanwy Evans, “Cultivating Misery,” *Time and Tide* (7 March 1953) 308–09.
- 52 *Radio Times*, 10 and 17 November 1950.
- 53 Yale University Library (Verses, 1869; Notes, GRG, 1877; Reminiscences of My Father, 1884; Collection of handwritten letters). New York Public Library (Berg Collection: Handwritten Diary, 1887–1902; Commonplace Book, 1887–1903; Miscellaneous Notes of Childhood). Cark H. Pforzheimer Collection in the Lilly Library, Indiana University.
- 54 Jacob Korg, “George Gissing’s Outcast Intellectuals,” *American Scholar* 19.2 (1950): 194–202; Russell Kirk, “Who Knows George Gissing?” *Western Humanities Review* (1950): 213–22.
- 55 Pietro de Logu, “La Calabria vista da uno scrittore inglese: George Gissing in viaggio da Paola a Cosenza,” *Il Ponte* (September to October 1950): 1326–27; Margherita Guidacci, *Sulla riva dello Ionio* (Bologna, It.: Cappelli, 1957).
- 56 John D. Gordan, *George Gissing: 1857–1903* (New York: New York Pub. Lib., 1954).
- 57 Jacob Korg, “Division of Purpose in George Gissing,” *PMLA* 70.3 (1955): 323–36; Royal A. Gettmann, “Bentley and Gissing,” *Nineteenth-Century Fiction* (March 1957): 306–14; A. C. Young, “George Gissing’s Friendship with Eduard Bertz,” *Nineteenth-Century Fiction* (December 1958): 227–37; C. J. Francis, “Gissing and Schopenhauer,” *Nineteenth-Century Fiction* (June 1960): 53–61; Harry E. Preble, “Gissing’s Articles for *Vyestnik Evropy*,” *Victorian Newsletter* (Spring 1963): 12–15.
- 58 Gordon Haight, “Gissing: Some Biographical Details,” *Notes and Queries* (June

- 1964): 235–36.
- 59 Joseph Wolff, “Gissing’s Revision of ‘The Unclassed,’” *Nineteenth Century Fiction* (June 1953): 42–52.
- 60 Pierre Coustillas, “Gissing’s Reminiscences of his Father,” *English Literature in Transition* 32.4 (1989): 419–39.
- 61 Anthony Curtis, “Gissing’s Book-Mask,” *Books and Bookmen* 3 (1958): 10; John Middleton Murry, “Gissing’s Heroines,” *Times Literary Supplement* (28 December 1956) 780; Richard Church, *The Growth of the English Novel* (London: Methuen, 1961).
- 62 Raymond Williams, *Culture and Society, 1780–1950* (London: Chatto, 1957); John Lucas, *Politics and Literature in the Nineteenth Century* (London: Methuen, 1971); Alan Swingewood, *The Novel and Revolution* (London: Macmillan, 1975); Patrick Brantlinger, *The Reading Lesson: The Threat of Mass Literacy in Nineteenth-Century British Fiction* (Bloomington, IN: Indiana UP, 1998).
- 63 John Carey, *The Intellectuals and the Masses: Pride and Prejudice among the Literary Intelligentsia, 1880–1939* (London: Faber, 1992).
- 64 Gilles Deleuze (1925–95). フランスの哲学者。現代思想の核心概念「差異」によって、ヒューム、ベルグソン、スピノザなどの哲学を論じた。
- 65 精神分析学において、再接近期 (*rapprochements*) は幼児に見られる発達上の節目 (14ヶ月から24ヶ月まで) を指し、その時期に幼児は母親に対して依存的になり、抱っこを求めると思えば急にそれを嫌がるなどの矛盾した行動が多くなる。『新版精神医学事典』(弘文堂, 1993) 260.
- 66 George Orwell, “George Gissing,” *London Magazine* 7.6 (1960): 36–43; Shigeru Koike, “Gissing in Japan,” *Bulletin of the New York Public Library* 67 (1963): 565–73. フランシスとプレブルについては註57を参照。
- 67 Edith Sichel (1862–1914). 『マリーズ・マガジン』(*Murray’s Magazine*) の第3号 (1888) に “Two Philanthropic Novelists: Mr Walter Besant and Mr George Gissing” (506–18) というエッセイを投稿し、のちにギッシングの友人となったアマチュア文芸批評家。 *Letters* 3: 198 を参照。
- 68 P. J. Keating, *The Working Classes in Victorian Fiction* (London: Routledge, 1971).
- 69 Robert Selig, “A Sad Heart at the Late-Victorian Culture Market: George Gissing’s *In the Year of Jubilee*,” *Studies in English Literature 1500–1900* (Autumn 1969): 703–20, “‘The Valley of the Shadow of Books’: Alienation in *New Grub Street*,” *Nineteenth-Century Fiction* (September 1970): 188–98; Charles Swann, “Sincerity and Authenticity: The Problem of Identity in *Born in Exile*,” *Literature and History* (Autumn 1984): 165–88; Allan Atlas, “George Gissing’s Concertina,” *Journal of Musicology* (Spring 1999): 304–18, “George Gissing on Music: Italian Impressions,” *Musical Times* (Summer 2001): 27–38; Martha Vogeler, “People Gissing Knew: Dr Jane Walker,” *Gissing Journal* 29.2 (1993): 1–10, “V. S. Pritchett on Gissing,”

- Gissing Journal* 29.4 (1993): 1–12; Bouwe Postmus, “Mr Harmsworth’s Blue Pencil: ‘Simple Simon’ Revisited,” *Gissing Journal* 31.1 (1995): 1–12, “Clara Collet’s Clairvoyance,” *Gissing Journal* 31.4 (1995): 1–32; William Greenslade, “Women and the Disease of Civilization: George Gissing’s *The Whirlpool*,” *Victorian Studies* 32.4 (1989): 507–23.
- 70 Janice Deledalle-Rhodes, “George Gissing, Henry James and the Concept of Realism,” *Gissing Journal* 33.4 (1997): 2–29. ジャン・イズレ (Jean Bernard Joachim Izoulet, 1854–1929) の最大傑作とは *La cité moderne, métaphysique de la sociologie* (Paris: Félix Alcan, 1894). ここから『我らが大風呂敷の友』の主人公 (Dyce Lashmar) は生物社会学的な理論を拝借している。
- 71 Francesco Marroni, “‘Thyrza’: Gissing, Darwin and the Destinies of Innocence,” *Gissing Journal* 34.3 (1998): 1–30; Luisa Villa, “The Grocer’s Romance: Economic Transactions and Radical Individualism in *Will Warburton*,” *Gissing Journal* 36.2 (2000): 1–19.
- 72 Lionel Stevenson, ed., *Victorian Fiction: A Guide to Research* (New York: MLA, 1964).
- 73 George H. Ford, ed., *Victorian Fiction: A Second Guide to Research* (New York: MLA, 1978).
- 74 Jacob Korg, “George Gissing: A Survey of Research and Criticism,” *British Studies Monitor* 3.3 (1973): 5–33.
- 75 John Halperin, “The Gissing Revival 1961–74,” *Studies in the Novel* 8.1 (1976): 103–20.
- 76 Pierre Coustillas, “Recent Work and Close Prospects in Gissing Studies,” *English Literature in Transition 1880–1920* 32.4 (1989): 407–17.
- 77 Pierre Coustillas, “George Gissing,” *Cambridge Bibliography of English Literature*, 3rd ed., vol. 4 (1800–1900), cols. 1535–52 (Cambridge, Eng.: Cambridge UP, 1999).
- 78 David Sutton, ed., *Location Register of Twentieth-Century English Literature Manuscripts and Letter: A Union of Papers of Modern English, Irish, Scottish and Welsh Authors in the British Isles* (London: BL Pub., 1988).
- 79 John Northern Hilliard (1872–1935) はニューヨーク州ロチェスターの作家・批評家で、『イヴの身代金』の長い書評を書いてギッシングに送った (*Letters* 5: 328)。Herbert Heaton Sturmer (1859–1923) は様々な雑誌の寄稿者で、ギッシングと7年間の文通関係があった (*Letters* 6: 106)。Adolphus William Ward (1837–1924) は序文つき全8巻のギヤスケル全集 (*The Knutsford Edition*, 1906) などの著作があるオーエンズ・カレッジの歴史および英語英文学教授 (1866–97) で、ギッシングは学生時代に宿題のエッセイ (“The English Novel of the Eighteenth Century”) を提出したことがある (*Letters* 1: 17)。Arthur Brownlow Forde (1847–1933) は1899年にインド国税庁での公務を退いてから何巻もの短篇小説を書

## 第2章 没後100年間におけるギッシング批評の進展

いた (*Letters* 9: 5–6)。John Wood Shortridge (1852–1921) はウェイクフィールドのギッシング家の主治医 (William Wood) の甥で、1888年11月20日にポンペイ近くのレストランでギッシングに会ってから、彼との文通関係が数年あった (*Letters* 9: 111)。

80 Brian Ború Dunne (1878–1962). アメリカのジャーナリスト。ギッシングは1897年9月29日にシエナの同じペンションで彼に会い、将来が有望な作家だという印象を持った。1年後にはアメリカの離婚法について彼に相談をしている (*Letters* 7: 122)。「ダンに捧げられた本」とは、Paul F. Mattheisen, Arthur C. Young, and Pierre Coustillas, eds., *With Gissing in Italy: The Memoirs of Brian Ború Dunne* (Athens, OH: Ohio UP, 1999) のこと。

\* 1880年から1970年までのギッシング関連の研究書や論文については、Joseph J. Wolff, *George Gissing: An Annotated Bibliography of Writings about Him* (De Kalb, IL: Northern Illinois UP, 1974) に、それぞれの文献の注釈が付いている。1965年以降の研究書に関する詳しい書評は、『ギッシング・ジャーナル』および『ギッシング・ジャーナル』 (<<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~matsuoka/gissing/gj-contents.html>> で検索可能) に収められている。また、1961年から1978年までの研究書は、John Halperin, *Gissing: A Life in Books* (Oxford, Eng.: Oxford UP, 1982) の“Appendix: Some Notes on the Gissing Revival”に、1979年以降については Peter Morton の“Continuation of the bibliographic essay, 1979-present” (<<http://ehlt.flinders.edu.au/english/Gissing/GissingStudies.htm>> に簡潔な書評がある。